

京都府織物産業における相楽木綿

横出 洋二

はじめに

京都府相楽郡木津町相楽では、明治から昭和戦前期にかけて縞・緋の手織り着尺木綿の生産が盛んに行われ、「相楽木綿」と呼ばれて京都、奈良、大阪、滋賀など近畿各地の農村に流通した。しかし戦後ほとんど途絶えたため郡内でもその存在を知る人は少なくなっている。

京都府の織物というと京都の友禅染めや西陣織、丹後の縮緬など絹織物が中心で、木綿や南山城の織物についてはこれまで注目されることはなかった。しかし京都府南部の相楽郡も伝統的に織物の盛んな地域で、木津、山城、加茂町には織物工場が今も点在し全国的な襖地の生産地となっている。そこで本稿では「相楽木綿」を中心に相楽郡の木綿織物について考察し、京都府における相楽郡の織物の位置づけについて考えてみたい。

1. 相楽村と相楽木綿

(1) サガナカモメン

相楽木綿の具体的な生産や流通については、1987年から1989年にかけて行われた京都府立大学の奥村萬亀子氏の調査によって明らかになった。^(注1) 同氏の現役で生産に携わっていた古老からの聞き取り調査は、古老の多くが故人となった現在において貴重なものとなっている。

さて筆者が「サガナカモメン」という言葉を実際に古老から聞いたのは2004年の相楽郡南山城村野殿での聞き取り調査であった。野殿地区は、国道163号線が通り、JR「大河原」駅や役場のある村の中心地北大河原地区から北に急斜面を登った高原に位置する。調査は藤織伝承を目的としたもので、大正13年(1924)生まれの二人の女性に聞き取りを行ったが、藤織については確認できなかった。機織り自体二人の話者は経験しておらず、嫁入りのとき母親が婚約後一年かけて糸を染めて織った縞の木綿を持って嫁いだ経験だけである。

嫁いだ後の生活衣料は伊賀上野(三重県上野市)の呉服屋や行商人から反物を買って着物

に仕立てたという。行商人は白栖(相楽郡和束町白栖)や上粕(同郡山城町上粕)からきていた。白栖の行商人は反物を入れた柿渋塗りの籠を一反風呂敷で包んで背負い、和束から笠置を抜けてくるヤマミチ(山道)を歩いてやってきた。上粕の行商人は汽車で来て大河原駅からやはり一反風呂敷を背負い、足にゲートルを巻いて野殿に登ってきた。行商人が来たのは春秋の2回くらいだったという。その上粕の行商人が「サガナカモメン」と呼ぶ反物を売っていたという。N氏もその反物を買った経験があり、今も着物に仕立てて持っている。相楽郡木津町鹿背山の古老の女性も戦後、サガナカモメンは丈夫でいいもので、そのうち無くなるので買っておいたほうがいいと言われたという。また同地区の昭和9(1934)年生まれ女性のFさんは戦後嫁ぐときにサガナカモメンを買ってもらい今も着物に仕立ててお持ちである。

以上のように相楽木綿は、戦後の昭和20年代にも相楽郡ではサガナカモメンと呼ばれて流通していたことがわかる。

(2) 相楽地区の概観

相楽地区は、西流する木津川が山間地から平野部に出て北に流路を変える南側に位置する。西部と南部が丘陵で、東部の平地に水田が広がる農村地帯である。東を木津町木津地区と接し、北は同町土師、西は精華町山田、南は奈良市歌姫の各地区と接している。集落は3つに分かれ、地区の北西の平地に中心集落大里、木津川沿いに北ノ庄集落、南の丘陵側に曾根山集落が山を背に位置している。

江戸時代には、相楽村として一つの行政村を構成し、天保郷帳で村高2035石を計上して^(注2)おり、南山城でも大村の一つであった。領主は同地域の他の村々同様に相給村的構成をとり、享保15年(1730)で旗本を中心に6人の領主がいた。^(注3)明治22年(1889)に吐師村と合併して相楽村に、昭和26年(1951)に木津町と合併した。^(注4)生業は江戸時代から稲作を中心とした農業であった。景観は東部の農地は大きく変わらないが、西部・南部の丘陵地の里山や山田は1980年代後半から関西学術研究都市開発で大きく変貌し、住宅や団地が集落を見下ろすように建ち並んでいる。

交通としては、江戸時代には村の東を南北に郡山街道が通り、隣村吐師に木津川舟運の主要な浜であった吐師浜があり、周辺村落の年貢や産物の他、木綿など大和の産物も街道を使って浜まで運ばれ伏見や大坂に送られた。舟運は昭和初期まで運航されたが、明治後半から鉄道輸送に輸送手段が移っていく。明治31年(1898)に大阪の片町から木津を通して名古屋に向かう関西鉄道が開通し、北ノ庄の東には新木津駅が開設した。^(注7)昭和3年(1928)には奈良の西大寺、伏見間を奈良電鉄が開通して村の北西に山田川駅ができ、物資輸送だけでなく村民の日常生活でも大阪、京都はより身近なものになった。



第1図 学研都市開発前の相楽地区 (S=1/28000)

(3) 副業としての織物

関西鉄道、奈良鉄道の開通など、明治30年代に入ると南山城も一層全国的な近代化への動きに影響されるようになる。そしてこの時期吐師村との合併後の相楽村役場から『京都府相楽郡相楽村是』が明治39年(1904)に刊行された。これは村の将来の発展を期すために

作成されたもので村内の産業を中心とした現況の調査報告と、それにもとづく課題と方策について記したものである。『村是』の発刊は当時の相楽郡長後藤善二が郡内の繁栄・発展を期するため各町村に対して押し進めた施策で、時期的に内務省中心に全国的な地方改良運動が進められていたときであり、その流れの中で行われたものと考ええる。^(注8)

『京都府相楽郡相楽村是』(以下『村是』)^(注9)の表「大字別人口数」^(注10)では、戸数は381戸(旧相楽地区は233戸)、人口2031人(同地区1311人)である。職業別では、表「職業別戸口数」^(注11)では、農業が専業264戸、兼業は46戸の計310戸で農業を主生業とした農村であることがわかる。農地は表「民有地段別及地価」^(注12)の「地目」では、田134町、畑39町である。表「田畑所有者等級」^(注13)では、20町歩以上所有者が1戸、5町歩以上2戸、1町歩以上5町未満が46戸、5反以上1町未満が44戸、5反未満が90戸、田畑未所有が198戸である。他の余業を兼業もしくはまったく農業以外で生計を立てる必要がある5反未満以下あるいは未所有は288戸で、約75%が小作地の耕作や農業以外の仕事を必要としたと考える。表「農業戸数の細別」^(注14)では、自作26戸、自作兼小作117戸、小作85戸となっている。第五章第二節の「農業の状態」^(注15)において、「自作兼小作者の拾分の六迄は自己の所有地を有すること多からず」と、自小作者の土地所有率の低さを記している。^(注16)

次に農業以外の職業について表「職業別戸数」^(注17)を見てみると、商業が40戸(専業27)、工業が12戸(専業10)、雑業が19戸(専業14)である。商業が一番多く、営業内容は表「商業の戸数の細別」^(注18)では、油、菓子、味噌麴、肥料、荒物、瀬戸物、煙草、小間物、魚類など25種もの多様な商売があげられている。工業は、「工業戸数の細別」^(注19)に大工、鍛冶、左官、石工、桶職、瓦屋根葺で、工業というより職人業である。大工が4戸と一番多く、他は1ないし2戸である。雑業は官吏、教員、公吏、神職、僧侶、医師、産婆などである。

『村是』第五章第六節「商工業の収益」に「村内の商工業は其の数僅かに全戸数の百分の十四に達せずして特に発達の見るべきもなく僅かに村内の需用を充たすに過ぎす」とあり、^(注20)村内生活の必需品販売、製作が主としたもので、村外への手広く出荷、販売するような特徴的な村内産業は多くなかった。ただ、表「商業の戸数の細別」の中に木綿の項目がある。これには17戸の従事者があり、商業戸数の中では一番多い。次が果物11戸、米穀の10戸であり、それ以外がすべて5戸以下で、1戸が一番多い。これからして木綿業が村内で特徴的な職種であったことがわかる。先の「商工業の収益」にも「商業の主なものとは酒類製造販売米穀木綿及肥料販売」と記している。^(注21)

表「商業の戸数の細別」の項目は「専業」「他業を兼業する者」「他業より兼業する者」と分けて数値を記載している。「他業を兼業する者」は商業を主生業に他の生業を副業的にするもの、「他業より兼業する者」は商業以外の仕事を主生業として商業を副業的に行う

者と考える。先の表「職業別戸数」の「商業」戸数には「他業より兼業する者」の数値は除いているので、これはより副業的に行っている戸数であることがわかる。この表で「木綿」の項目を見ると、「専業」2、「他業を兼業する者」2、「他業より兼業する者」13となっており、副業で「木綿」業を行っていることがわかる。

次に表「農家副産物の収益」^(注21)では、「醸酒」、「生繭」、「機業」、「藁細工」、「養鶏」、「鶏」が挙げられているが、この中で「収入額」が一番多いのが「機業」で、生産額5883反で9267円である。2位の醸酒の3920円を大きく引き離している。他は3000円未満である。「純益」でも「機業」2031円に対して2位の「藁細工」は752円である。表では「機業」の「種類」として「木綿」と記していて、副業の収益からも「木綿」が相楽村の代表的で、特徴的な副業であったことがわかる。この表を受けて同書でも次のように記している。^(注22)

前表に示すか如く現時に於ても農家の副産物中第一位を占むるものは織物にして其種類は木綿は木綿縞及絹綿交織に過ぎざるも販路は近郷を始め京都大阪を主として近江地方に及べり

とあり「木綿縞及絹綿交織」の「織物」が「副産物中第一位」であったと記し、盛時には「農家の経済を裕にし為に肥料を施すの財力を増し農業の発達を資けしこと尠なしとせず」というほど織物業は村で大きな位置を占めていた。

(4)モメンヤ

以上、『村是』から明治期の相楽村において木綿の生産が村内の副業的「商業」として重要だったことがわかる。ただ木綿織物が「工業」の範疇でなく「商業」に記されていることはどういうことだろうか。商業となると業態が織物製品の販売業務が中心ということになる。では表「商業の戸数の細別」における「木綿」業とは具体的にどういった業態であろうか。『村是』には細かい仕事の様態については記していないが、これはモメンヤと呼ばれた織元業であると考ええる。モメンヤについては、奥村氏がモメンヤを営んだ福岡家の福岡善盛氏(大正11年生)と母親ふじ氏(明治33年生)ら聞き取りを行い、調査結果を報告されている。^(注23)以下奥村氏の報告と筆者の福岡氏からの補足調査から『村是』の「機業」について記してみたい。話者の年齢で内容は、大正から昭和の戦前期にかけての様子となる。

相楽村においてモメンヤは曾根山地区に2軒、大里地区に3軒あった。モメンヤの仕事は、簡単にいうと原料糸を購入し、経糸整経して農家の女性に賃織りしてもらい、織り上がった製品を買いにきた業者に販売するいわゆる織元業である。

善盛氏によると、祖父は米の仲買をしていて、モメンヤは祖母のクラ(享年81才)が実家

の曾根山から嫁いだ後始めたという(父が明治30年生まれなので、その前に嫁ぐ)。

具体的な仕事の流れとして、最初に原料糸の調達があり、これは大阪から購入したという。購入した糸は緋柄の場合は緋括りをしたが、これは近所のおばあさんに賃仕事でしてもらった。柄はモメンヤが考えたが、買付に来た人からも売れ筋の柄を聞いて参考にした。り、直接柄の指定を受けて生産することもあった。

緋括りの後木津のコンヤに藍染に出した。染め上がると自宅で糊付けして乾燥させた。整経前の糸繰りも村内やときに遠方の鹿背山の人にもしてもらった。経糸整経とチキリ巻きはモメンヤで行った。善盛氏も子供のときチキリ巻きを手伝わされたという。製織は賃織りに出した。賃織り先は相楽の他、鹿背山、吐師、山田、三山木、狛田、祝園で、同氏夫人は姑ふじ氏から和東にも賃織りに出し、糸を取りに来たときはお弁当やお茶を出したと聞いたという。織手はチキリと緯糸を取りにきて、モジリ通しや箆通しなどの機掛け作業や、緯糸の管巻きは織手が行った。織り上がるとモメンヤに持って行き賃金を受け取った。大正頃で縞一匹1円、緋1円50銭だった。販売は週に1度村の会所で行われた納税検査で検印をうけてから販売した。だいたいこの日に和東や奈良、河内方面から業者が買付にやってきた。業者には男性も女性もいたが、女性のほうが柄について詳しいのでよかったという。

筆者は福岡家の親戚で同じくモメンヤをしていた福岡アキノ家のアキノさん(大正7年生)から聞き取りを行ったので同家の場合を補足してみたい。アキノさんは奈良の秋篠から昭和16年(1941)に嫁いできたが、そのとき明治21年(1888)生まれの姑のタキさんがモメンヤを営んでいた。タキさんの母コギクその先代のオキクさんもモメンヤを営み、同じ相楽村の大里に嫁いだタキさんの娘さんも母にならってモメンヤをしていた。アキノさんが嫁いだ頃は糸の配給などもあって原料が入手できず、相楽でほとんどモメンヤを営む家はなくなっていたが、ただタキさんは残った糸で戦後もしばらく続けた。アキノさんはモメンヤを継ぐことはなかったので、細かい仕事の内容はわからないが、新婚時代にタキさんがモメンヤの仕事をしていたので見聞きした経験がある。

アキノさんによると、糸は愛知県一宮市で仕入れていたという。緋柄はタケさんが考えていたが、ソロバンがたっしやな人でしょっちゅう緋位置の計算をしていたのを覚えている。たまに疲れてソロバン枕に寝ていたのを目にしたこともあったという。染めはやはり木津のコウヤに出した。2軒あって本町通りの家はコントクといった。染め上がった糸は家でタツにノベ(経糸整経)、賃織りに出した。アキノさんの母は同家から嫁いでいるので、アキノさんは子供のときからこの家に来ることもあり、ノベる作業(整経)を見たことがあり、そのとき手伝いの人も来ていたという。チキリには4反分の経糸を巻き、機は数台も

っていてダシバタ(機の貸出し)もしていた。ヌキイト(緯糸)は必要な分を棹秤で量って渡した。しかし織り上がった後糸が余ることもあったが、それは織った人が自家用の織物のヌキイトに使った。相楽の女の人はみな機織りができ、それができないで嫁ぐと恥をかくといわれた。

製品は各地から買い付けに來たオイネサンに売った。反物を風呂敷に包んでオイネで(背負って)帰ったのでそう呼んだがアキノさんもオイネサンへのご飯を出したりするのに忙しかったという。和束町湯船から來た人に歩いて帰るのでお腹かすくからとおにぎりを持たせたこともある。和束以外からは大津や奈良の長谷寺の奥の方(宇陀郡)から來ていたのを覚えている。支払いは掛売で米や麦がとれるときに集金に回った。タケさんはその宇陀郡の人のところに集金に行ったとき台風にあつて帰れず、知らない家にとめてもらったことがあるという。そのとき御馳走になったオカイサン(お粥)が、大変ありがたかったとアキノさんは聞かされた。

以上見たように、木綿の製織は、農繁期で賃織りの人手がないときはモメンヤ自らも行ったが、基本は賃織りであり、モメンヤの主な仕事は製品の販売である。織機を自家の家屋や別棟に数台以上揃え、人を雇用しての工場制手工業でなく、基本的に問屋制家内工業の段階であった。福岡善盛家、福岡アキノ家ともにモメンヤを営んだのは家の女性である。善盛氏の記憶で相楽にオキクサンと呼ぶ名前が3人もいてみなモメンヤをしていたというようにモメンヤの仕事は女性による副業だったことがわかる。『村是』の表「商業の戸数の細別」で、「木綿」では「他業より兼業する者」がほとんどであり、聞き取りからしても明治期から農家女性の副業としての経営であったと考える。

2. 相楽郡の機業

(1) 相楽織物会社

『村是』が刊行された頃相楽村の「機業」はやや衰退傾向にあった。そのため同書の第二編将来の規劃において「織物業の挽回策」の項目を設けてその対策を記している。その項目によると、盛時には生産額が36629反で、売り上げが44532円、仮定利益14651円あり、^(注24)『村是』刊行時の生産額5883反、9267円(売り上げ)に比べるとかなりの生産量があった。そうした拡張を背景に明治29年(1896)には「相楽織物会社」が設立された。『村是』は会社の詳細は記されていないので経営内容はわからないが、「機業」衰退にともない『村是』が刊行された明治39年以前に解散している。^(注25)衰退の原因として同書が指摘しているのは、同業者間において私的利益追求に走り、相楽の「機業」全体の繁栄を考えていない。「濫売」による一時的利益を求め「染色地質意匠に於て欠点を生ぜしのみならず粗悪劣等品を出し」

て「販路」縮小させたというように内部的な問題を原因としている。そして「農家の経済にも影響」するので「機業家」は「進んで」挽回策を講じる必要があり、その方策としてはまず「需要者及販売者の信用」、次に「原料の仕入れを着実にして廉価ならしめ」、「染色を改め退色の患なからしめ」、「地質を佳良にし実用に適し」^(注26)、「意匠を凝らして製品の高尚ならんこととを期さざるべからず」とその方策をあげている。

(2) 相楽郡織物組合

相楽織物会社が設立された前年明治28年(1895)には、相楽郡の織物・染色業者が組合を設立している。^(注27)趣旨は「改良の道講ずれば其産額は直ちに一割二・三分増加見るべし」^(注28)とその目的がいわれていたが、こうした組合や会社設立の20年代後半が相楽郡の機業における一つのピークであったのであろう。

春日豊は、国内の産業革命進展で労働賃金が上昇したことで、綿製品の購買層も増え、綿織物の国内供給額は、1890年代から10年間で4.2倍に広がったと考察している。広島県の備後絣の場合、明治元年(1868)に200反の生産高が、明治13年(1880)に115000反と飛躍的伸びた。明治末の明治44年(1911)年に330000反、大正14年に847139反、昭和4年には1033754反と百万反を越し全国的流通商品として発展していく。^(注29)備後の絣生産だけの数字だが近代に入り着尺木綿も年々の好不況に影響されながらも順調に需用と市場は拡大し、相楽村も含め相楽郡における綿織機業進展もこうした国内市場の拡大の影響と考える。

しかし組合設立4年後の明治32年(1899)には早くも組合内部で地域的な対立から解散騒動がおきている。理由は「組合員は木津町を中央に東部・西部に分れ、営業の繁栄は東部の方西部より良きと、員数も多きより、重役組織の際など、兎角東部のもの多数を占むるより、西部は常に不快の念抱き居る折柄、近来組合経費の多となりしため紛擾を醸した」^(注31)とあり、東部の機業家の収益が大きく、それに比して西部が小さいため役員人事や組合経費負担で後者が不利になっていたことによる。大正9年(1920)刊行の『京都府相楽郡誌』によると、「本郡の機業は主として上粕、木津、瓶原、高麗、加茂、相楽の一町五ヶ村に盛んにして」^(注32)とあり、加茂、瓶原、上粕には後述するように現在も襖地製織を中心とした織布工場があり、東部は瓶原・加茂の業者、西部は相楽の業者と考える。

明治14年(1881)の『京都府地誌』は、ほぼ近世村に相当する府内の各村ごとの概要について記したもののだが、これに「民業」の項目があり、瓶原地区内の河原村、岡崎村、例幣村と高麗村に合併前の上粕村について下記のように記している。^(注33)

(河原村)

男農ヲ業トスル者八十二戸商業一戸余ハ雑業女農ニ従事スル傍ラ製茶裁縫ヲ兼ヌ

(岡崎村)

男ハ農ヲ專業トスル者五十二戸工商業五戸女各夫業ヲ助ケ余暇裁縫ス

(例幣村)

男農業百三十戸工業二戸五戸女農事ヲ専トシ傍ラ織縫製茶ヲナス

(上粕村)

男農ヲ專業トスル者四百十一戸商業十二戸 女農ニ従事シ余暇製茶裁縫ヲ兼ヌ

これら各村の女性の業として「裁縫」「織縫」と記されているが、地誌の相楽、綴喜、久世の各郡内の村の「民業」で「裁縫」「織縫」と記されている村はこの4村以外にない。そして郡誌においてこの4村で織りが盛んであるとの記載、現在の工場の立地などから「余暇製茶裁縫ヲ兼ヌ」とは家内の自給用の縫製でなく、副業としての賃仕事ではないか、例幣村には「織縫」とあり織りも記されている。この地誌からして明治10年代から加茂・上粕地域は相楽郡だけでなく南山城全体からしても織布業が盛んな地域としての特徴がうかがえる。相楽村については地誌の民業に紡織関係は無いので、この時期はまだめだった副業になっていなかったのであろうか。

さて、次に南山城及び府下全体における相楽郡の機業の規模について『京都府統計書』^(注34) (以下『統計書』)から見てみたい。

(3) 京都府下における相楽郡の機業

『統計書』を使つての考察は奥村氏が「丹後地方の自家用織物と荒山綿」^(注35)及び「南山城地域の自家用織物と相楽木綿」^(注36)の論考においてすでに行っている。前者の論考では府下全郡の明治39年(1906)から昭和13年(1938)までの綿木綿の生産量^(注37)を、後者では明治39年から昭和12年(1937)までの相楽郡の各種綿織物の生産量^(注38)を集計して表にされている。

2つの集計表から相楽郡の織物は「蚊帳地という特産品を持ち、綿、織色木綿では中郡に及ばないが、緋、糸入木綿を加え多種であり、府内では中郡に並び最も長い期間つまり昭和初期まで生産された」と論究された^(注39)。前者の表を筆者が統計書から再度集計したのが第1表である。この表からまず相楽郡と中郡は全期間を通して生産が継続され、比較的生产量が多く、綿木綿に関して京都府の2大産地であったことがわかる。他の地域は明治末から大正前期にかけての一時的な生産にとどまっている。たとえば山城地域では京都市は明治末にほぼ生産は無くなり、比較的連年して生産している紀伊・宇治・綴喜郡も紀伊郡の数年を除き生産量は少なく、大正7年の同郡の生産を最後に終わっている。丹波地域は船井・天田郡が大正4年(1915)から6年にかけて相楽・中郡をしのぐ生産を挙げているが、7年には減少し、9年にほぼ生産は終わる。中郡以外の丹後地域も丹波郡を除き明治末から生産があるが、生産は少なく、大正9年(1920)で終わっている。

第1表 『京都府統計書』にみる絹木綿の生産（単位：反）

	山城地域								丹波地域					丹後地域					
	京都市	愛宕郡	葛野郡	紀伊郡	宇治郡	久世郡	綴喜郡	相楽郡	南桑田郡	北桑田郡	船井郡	何鹿郡	天田郡	加佐郡	与謝郡	中郡	竹野郡	丹波郡	熊野郡
明治39年	47616							28398				250				690			
明治40年	50				65			7583	282	20		495				158			
明治41年	6475				60			6913		22						300			
明治42年	14457		54		70			10000	133							4008			
明治43年					75		650	7472		5	100	30		128	152	2732			
明治44年	5317	8155			73		650	5226		128	100	495			174	2713			
大正元年					55		650	7435		26	350	1171		93	266	3578	200		
大正2年					60		650	4795		208	215	1318		98	120	3879	558		60
大正3年	299				5200	60		4709		141	103	810		85	71	3976	320		
大正4年					60			6100		25	25314	149	2891		370	7497	400		
大正5年					6800	60		10230		5	18790	124	3051	120	372	5475	450		
大正6年					6800	1100		4245	20		18560	1230	2898	120	370	2100	645		
大正7年					7000			3455	50		790	795	1758	190	342	300	550		
大正8年								235	80		170	1285	1100	250	330	100	375		
大正9年								22150	30		620	1125	962	800	80	880	50		
大正10年								8000					80			2280			
大正11年								6360				42	100			15121			
大正12年								6820	14						112	16091			
大正13年								6210		36						17926			
大正14年								5000		35					613	18077			
昭和元年								16000							160	33205			
昭和2年								15064								17645			
昭和3年								18520								42063			
昭和4年								12520							165	39301			
昭和5年								5200							255	41031			
昭和6年								1377							105	51749			
昭和7年								1482								47971			
昭和8年								1450								36543			
昭和9年								1600								24736			
昭和10年								800								38033			
昭和11年								800								28043			
昭和12年																29581			
昭和13年																9949			

次に絹木綿だが、奥村氏は後者の表で相楽郡の絹木綿の府内生産比の統計を挙げて、その高比率から絹は相楽郡の独壇場と指摘している。同氏は絹に関して集計表を挙げていないので、府内における絹木綿の生産状況についてわかりやすくするため筆者が新たに絹生産のみ集計した(第2表)。全体として生産の期間や郡は絹木綿と同じ状況であるが、ただ絹以上に相楽・中郡に集中し、府下で絹木綿はほぼ2郡でのみ生産されていたと言えるほどの状況が読みとれる。

相楽郡を除くと山城地域では、宇治と綴喜だけ生産されているが、明治末から大正前期にかけて少量生産されただけである。丹波地域も船井・天田・何鹿郡で大正5年(1916)から9年にかけての少量生産である。丹後は中郡を除き加佐郡だけ丹波と同時期に少量生産している。そして中郡は明治42年から通年で生産されたが、大正2年から相楽郡に比べかなりの少量生産になり、大正6年から4年間生産が中断されている。大正10年に再開し、翌年から相楽郡と並んで大量生産されているが、昭和元年から生産は減り、絹生産はなくなる。同郡では大正11年から絹木綿の生産が急増し、以後相楽郡を抜いて1位の生産を継

第2表 『京都府統計書』にみる緋木綿の生産（単位：反）

	山城地域							丹波地域					丹後地域						
	京都市	愛宕郡	葛野郡	紀伊郡	宇治郡	久世郡	綴喜郡	相楽郡	南桑田郡	北桑田郡	船井郡	何鹿郡	天田郡	加佐郡	与謝郡	中郡	竹野郡	丹波郡	熊野郡
明治39年								1000											
明治40年								480								20			
明治41年					10			782											
明治42年					15			1500								849			
明治43年	-				15		40	795		3	10					742			
明治44年					13		40	705			10			160		1128			
大正元年					12		40	890			8			4		490			
大正2年					10		40	729								120			
大正3年					10			707								130			
大正4年					12			675		2	506	120		150		100			
大正5年					12			607		2	370	161	330	20		100			
大正6年								425			292	207	270	30					
大正7年								365			90	95	260	80					
大正8年								115	10			31	25	50					
大正9年								4025	10			23	20	30					
大正10年		200						4050								100			
大正11年		200						6082				4				5286			
大正12年								6005								5253			
大正13年								6015								3773			
大正14年								5510								5200			
昭和元年								6600								1703			
昭和2年								5650						500		209			
昭和3年								5650						370		949			
昭和4年								5650						40		268			
昭和5年								14800								205			
昭和6年								1883						190		97			
昭和7年								1872											
昭和8年								1845								37			
昭和9年								1875								15			
昭和10年								1500											
昭和11年								1500											
昭和12年																			
昭和13年																			

続する。傾向として同郡は緋より縞木綿に力をおいた生産であったことがうかがえる。

一方相楽郡は全期間中断することなく緋を生産し、明治44年(1911)を除き常に生産量一位である。奥村氏の表の生産比を見ると、大正期は、前期の丹波での生産、後期中郡の大量生産によって生産比は40～50%に下がるが他の時期は80～100%である。昭和6年からは縞より緋の方が多くなっている。このことから相楽郡の木綿生産は常に需用が多かったのか緋を意識した生産が行われ、結果同郡の特徴的な織物となり、奥村氏のいうように府内において緋生産は独壇場であったといつてよい。

以上縞・緋木綿に関しては相楽・中郡の2極集中であるが、これだけから両地域が他地域に比して府内でも特徴的な木綿織物の産地であったとは言えない、他の織物の生産状況を見る必要がある。縞・緋以外についても奥村氏の表「相楽郡における綿織物」において府内生産比を記載して凡その生産状況はわかるが、相楽郡以外の久世郡・綴喜郡・京都市など他の地域の具体的な状況がわかりにくい。そこで今回は明治から大正期にかけての各種の木綿織物生産状況を見て、全体を予測したい。第3表の1～3は統計書に掲載された

明治39年から大正3年までの各郡の綿織物の生産状況を集計したものである。

このうちまず明治39年の木綿生産を詳細に見てみたい。この年統計に上がっているのは、京都市、相楽郡、宇治郡、葛野郡、何鹿郡、加佐郡、中郡である。織物の種別に関係なく生産量だけで単純比較してみると、京都市565095反、相楽郡191501反、宇治郡15860反、葛野郡123979反、何鹿郡1350反、加佐郡500反、中郡690反である。これから綿織物に関して京都市、葛野郡、相楽郡が主産地であることがわかる。京都市の場合その他の量が多くこれを除くと206039反となり、やはりその他を除いた相楽郡の182501反と近接してくる。

次に織物の種別だが、その他を含め京都市が8種類、相楽郡が7種類で他は1～3種類で、奥村氏の考察どおり相楽郡は府下の中で綿織物の種類が多いことがわかる。生産量の多い葛野郡は綿フランネルと女帯地の2種類で、しかもほとんど綿フランネルのみの生産であり、宇治郡は白木綿だけである。京都市と相楽郡の比較では白木綿、縞木綿は共通だが、それ以外では前者は縮木綿、綿フランネル、袴地、男帯地類、女帯地類に対して、後者は縞木綿、緋木綿、蚊帳地と生産している織物種類が異なる。以上のことから京都市の綿製品は帯地に特徴があり、相楽郡は縞・緋の着尺木綿と綿蚊屋を特徴としていたといえる。山城地域に関して他の年も同傾向で、木綿生産は京都市及びその周辺と南部の相楽郡にはほぼ限られ、乙訓郡と南山城の久世・綴喜郡は伝統的に木綿織物が産業として成立していなかったことが予想できる。

丹波・丹後地域は、明治39年には中郡も含めてほとんどめだった生産状況にない。しかし明治末から大正期にかけてさきほど見たように縞・緋の生産が徐々に増えてくる。縞・緋以外では丹波の何鹿郡と丹後の与謝郡での白木綿と中郡の織色木綿の生産が増えているのが特徴である。

大正4年(1915)以降については、同じく『統計書』を集計して今後検討したいが、とりあえず昭和元年の集計だけ上げて推移を予測しておきたい。元年の統計では、葛野郡、紀伊郡、宇治郡、綴喜郡、相楽郡、船井郡、何鹿郡、与謝郡、中郡の生産量が計上され、京都市は木綿の生産がない。このうち生産量に関しては、葛野郡84562反、相楽郡99330反、中郡71140反で、他は1万反以下で、この3郡に偏っている。また葛野郡はやはり綿フランネル1種類の生産であり、同じく葛野郡、紀伊郡、何鹿郡、与謝郡も1種類で、中郡は3種類、対して相楽郡は6種類となおこの時期多種類である。先に見た縞・緋の生産状況も合わせて考えると丹波・丹後の木綿生産は中郡を除き、明治末から大正前期にかけての一時的な生産であったかと考えられる。以上見てみると全期間通じて多種類の木綿を生産し、かつ緋木綿、綿蚊帳という特産を持った相楽郡は京都府下全体において突出した木綿生産の盛んな地域であったことが確認できるのではないだろうか。着尺地の生産に関し

第3表の1 『京都府統計書』にみる木綿の生産（単位：反、但し帯地は本）

		白木綿	双糸其他綿木綿	紺木綿	緑色木綿	蚊帳地	縮木綿	縮フランネル	袴地類	男帯地類	女帯地類	其他	計
明治39年	山城	京都市	9146	47616			15374	36891	8728	2933本	85351本	359056	117755
		愛宕郡											
		葛野郡						123459			520		123979
		紀伊郡											
		宇治郡	15860										15860
	丹波	綴喜郡											
		久世郡											
		相楽郡	110103	28398	1000	3000	40000					9000	182501
		南桑田郡											
		北桑田郡											
	丹後	船井郡											
		何鹿郡	1000	250		100							1350
		天田郡											
		加佐郡	500										500
		与謝郡											
明治40年	山城	京都市											
		愛宕郡		50				343585	10	1877	46250	395155	786927
		葛野郡									520		124687
		紀伊郡						124167					
		宇治郡	17300	65								10	17375
	丹波	綴喜郡											
		久世郡									2000		2000
		相楽郡	127637	7583	480	1413		6200				15000	158313
		南桑田郡		282									282
		北桑田郡		20									20
	丹後	船井郡											
		何鹿郡	1000	495		100							1595
		天田郡											
		加佐郡	1000										1000
		与謝郡	72				1500					180	1752
明治41年	山城	京都市											
		愛宕郡		6475				289121		1648	50124	275681	623049
		葛野郡											
		紀伊郡						157694					157694
		宇治郡	14267	60	10							10	14347
	丹波	綴喜郡									2000		
		久世郡											
		相楽郡	64254	6913	782	80	3950					74910	150889
		南桑田郡										450	
		北桑田郡		22									22
	丹後	船井郡											
		何鹿郡	1510			350							1860
		天田郡											
		加佐郡	200										200
		与謝郡	1050			350	1500					1200	4100
明治42年	山城	京都市											
		愛宕郡	10662	14457			9800	388033	3809	275	64407	123315	614758
		葛野郡		54				314398					314452
		紀伊郡						1200				4000	5200
		宇治郡	15230	70	15								15315
	丹波	綴喜郡											
		久世郡									1800		1800
		相楽郡	25000	10000	1500			600				12000	49100
		南桑田郡	171	133									304
		北桑田郡											
	丹後	船井郡		44							7645		
		何鹿郡	1200									1200	
		天田郡											
		加佐郡	150										
		与謝郡	2136									1732	
	丹後	中郡	60	4008	849	10037						360	
		竹野郡											
		熊野郡											

第3表の2 『京都府統計書』にみる木綿の生産（単位：反、但し帯地は本）

		白木綿	双糸其他綿木綿	紺木綿	緑色木綿	蚊帳地	縮木綿	縮フランネル	袴地類	男帯地類	女帯地類	其他	計
明治43年	山城	京都市	13990(個別の反数記載無し)				8926	177155		3096	78457	239833	507467
		愛宕郡											
		葛野郡											
		紀伊郡						1200				2500	3700
		宇治郡	20025	75	15								20115
		久世郡											
	丹波	綴喜郡		650	40								690
		相楽郡	9031	7472	795		2165	450			14887		34800
		南桑田郡										140	
		北桑田郡	4	5	3								12
		船井郡	480	100	10								590
		何鹿郡	3780	30		1657							5467
	丹後	天田郡											
		加佐郡	206	128									334
		与謝郡	6762	152									6914
		中郡	215	2732	742	9731						200	13620
		竹野郡											
		熊野郡											
明治44年	山城	京都市	7518	5317				295304	2750			412436	723325
		愛宕郡											
		葛野郡											
		紀伊郡						1300				3000	4300
		宇治郡	16025	73	13								16111
		久世郡											
	丹波	綴喜郡	1000	650	40							350	2040
		相楽郡	2268	5226	705	35	3483	1565	435		14887	19330	47934
		南桑田郡	270			630							900
		北桑田郡	14	128		25							167
		船井郡	720	100	10	50						50	930
		何鹿郡	3809	495		958							5233
	丹後	天田郡											
		加佐郡	106		160							76	342
		与謝郡	7541	174		100							7815
		中郡	3489	2713	1128	9109					150	200	16789
		竹野郡											
		熊野郡											
大正元年	山城	京都市	8860				8926	273611	985				292382
		愛宕郡										318380	
		葛野郡											
		紀伊郡					900	800				4000	5700
		宇治郡	13919	55	12							10	13996
		綴喜郡		650	40							1500	2190
	丹波	久世郡											
		相楽郡	1962	7435	890		5322	443				10325	26377
		南桑田郡				82							82
		北桑田郡		26		8							34
		船井郡	660	350	8							790	1808
		何鹿郡	3255	1171		1000							5426
	丹後	天田郡											
		加佐郡	234	93	4								331
		与謝郡	5369	266		252							5887
		中郡	468	3578	490	10205						360	15101
		竹野郡	20	200		150							370
		熊野郡											
大正2年	山城国	京都市	8414					78502	233	433	78228	695788	861598
		愛宕郡											
		葛野郡		900				800				4000	5700
		紀伊郡		60	10							464	15554
		宇治郡	15020	650	40							1500	3190
		綴喜郡	1000										
	丹波国	久世郡											
		相楽郡	7152	4797	728	393	5330	30				6953	25383
		南桑田郡				80							80
		北桑田郡		208		6							214
		船井郡	602	215									817
		何鹿郡	3348	1318		1200							5866
	丹後国	天田郡											
		加佐郡	250	98									348
		与謝郡	976	120		202							1298
		中郡	479	3879	120	8185						370	13033
		竹野郡	185	558		150							893
		熊野郡	40	60									100

て、京都市はあくまでも絹織物の生産地であり、着尺木綿に関しては最南部の相楽郡と最北部の中郡が生産の中心であったといえる。

(4) 相楽郡における相楽木綿

以上『統計書』から相楽郡が府下において木綿織の盛んな地域であったことを見てきた。

第3表の3 『京都府統計書』にみる木綿の生産（単位：反、但し帯地は本）

		白木綿	双糸其他織木綿	緋木綿	織色木綿	蚊帳地	縮木綿	縮フランネル	袴地類	男帯地類	女帯地類	其他	計
大正3年	山城国	京都市	9527	299				42904	1691	1543	66787	757919	880670
		愛宕郡											
		葛野郡	30060					84562					114622
		紀伊郡	500	5200				1500				7000	14200
		宇治郡	11020	60	10							5300	16390
		綴喜郡	1000		40							1500	350
		久世郡											
		相楽郡	5663	4709	707	50	5320	30				6435	22914
		南桑田郡	270			630							900
	丹波国	北桑田郡		141									141
		船井郡	967	103								45	1115
		何鹿郡	3294	810		1500							5604
		天田郡											
	丹後国	加佐郡	1300	85									1385
		与謝郡	31	71								16	118
		中郡	710	3976	130	9411							14227
		竹野郡	70	320		80							470
		熊野郡											
昭和元年	山城国	京都市											
		愛宕郡											
		葛野郡						84562					84562
		紀伊郡						1500				7000	8500
		宇治郡										5300	
		綴喜郡										1500	350
		久世郡											
		相楽郡	6400	1600	6600	1420	61000	20000				2310	99330
		南桑田郡											
	丹波国	北桑田郡											
		船井郡										45	45
		何鹿郡	321										321
		天田郡											
	丹後国	加佐郡											
		与謝郡		160									
		中郡		33205	1703	36232						320	480
		竹野郡											71140
		熊野郡											

※数量の単位は帯地は本、他は反である。

ただ『統計書』では郡内のどの地区がどの織物の中心であったかは個別的にはわからないが、先の『相楽郡誌』『相楽村是』の記述や現在の織物工場の立地などから相楽、木津、加茂、瓶原、上狛であったと考える。

『村是』には織物の種類について、「其種類は木綿縞及絹綿交織に過ぎざる」と記し、^(注40)そして相楽木綿の由来について述べた箇所では次のように記している。^(注41)

本村における織物業は今を去る六十年前奈良地方より布或は上布を機臺にて賃織し工錢得んことを以て嚆矢とし明治初年頃に至りては布を廢し白木綿八反物を賃織り爾後四五ヶ年を経て村内二三の農家製織に着手し續て木綿縞を織出せり之實に相楽木綿の始めとす以後年を経る毎に擴張し機業戸數増加し年々歳々多額の製造をなすに至り

これによると「明治末年頃」は白木綿だったが、数年後に木綿縞を織りはじめたと記す。

明治39年の『統計表』では、相楽郡の木綿織物の種類は「白木綿」「双子その他縞木綿」「緋木綿」「織色木綿」「蚊帳地」「双子その他糸入り」であるが、『村是』には「木綿縞及絹綿交織に過ぎざる」とあり、相楽郡に特徴的な蚊帳地は織っていない。それと『村是』の引用箇所に「二三の農家製織に着手し續て木綿縞を織出せり之實に相楽木綿の始めとす」とあり、当時すでに生産者側から相楽で生産された木綿を「相楽木綿」と称しており、地

域呼称を持つ特産品として「相楽木綿」が成立していたことが伺える。そして「木綿縞を織出せり之實に相楽木綿の始めとす」と述べていることは各種木綿の中でも木綿縞が「相楽木綿」の特徴であると認識していたことが言えるのではないだろうか。これは逆に「相楽木綿」という呼称も含めて相楽以外の加茂・瓶原など他の相楽郡の織物産地に対しての特徴であり、白木綿や蚊帳地など縞木綿以外のものが主製品だったことが考えられる。このことからまだ推測の域を出ないが、『統計書』に出てくる戦前の相楽郡の織物のうち木綿の縞・緋の多くは相楽での生産であり、対し加茂・瓶原の東部地区は蚊帳や襖地製品の中心であったことが考えられる。

おわりに

以上近代における相楽木綿についてみてきた。まとめると、京都府は近代以降も日本の織布産業において大きな位置を占めていたが、それは西陣や友禅、縮緬など高級絹織物が中心であり、木綿はほとんど京都の織物の中で顧みられることはなかった。しかし、京都府でも木綿の商品生産は行われており、生産地が京都市、相楽郡、中郡に集中していたという地域の特長があった。そして生産では白木綿を除くと、京都市は帯地が中心で着尺木綿はほとんど生産しておらず、対して相楽郡と中郡は帯地の生産は皆無で着尺木綿が中心である。大正期に丹波地域でも着尺木綿が生産されているが相楽・中郡に比べて相対的に少量であり、昭和期に途絶えている。そのことから着尺木綿の産地は相楽・中の2郡に限られ、府内全体でもかなり特徴的な着尺木綿の産地であったことがわかる。そして中郡の生産が伸びるのは大正期以降で、明治期にはほぼ相楽郡の独占的な様相を示していた。大正11年(1922)に縞木綿の生産量は中郡に抜かれるが、緋に関しては明治以降全期間相楽郡が圧倒的に多く、「相楽緋」と名づけてよいような府内において他にない特徴的な製品であった。

しかし、生産形態が農家の副業的な織元による賃織り手織り生産に終始し、力織機による工場生産へと移行しなかったため備後や伊予などの大量生産品の全国流通や戦時統制経済などの影響によって基本的に戦前で相楽木綿は終焉したと考える。

以上、奥村氏の考察を補足する内容となったが、小稿でより相楽木綿が府内において他にない特徴的な木綿であり、さらに相楽郡が南山城だけでなく府全体でも木綿織物の産地であったことがはっきりしたのではないかと思う。今後奈良や河内など周辺地の木綿生産の状況と比較することで畿内における相楽木綿生産の位置付けを鮮明とすることができ、また柄や材質など製品自体の比較研究によって全国比較の中で工芸的な面での木綿の特徴をつかむことができるのではないだろうか。

最後に相楽郡で近代に織物産業が盛んとなったのは近世の伝統的下地があったと考え
る。『村是』で「本村における織物業は今を去る六十年前奈良地方より布或は上布を機臺
にて賃織し工錢得んことを以て嚆矢」と記しており、この木綿は近世奈良の特産品であつ
た奈良晒の製織が前史としてあり、近代における晒の衰退の後、相楽では着尺木綿を加茂
などは蚊帳そして襖地を主力製品とし、工場化した後者が結果相楽郡の中心的織物へとな
るという展開を予想しているが、これについては稿をあらためて論じたい。^(注42)

(よこで・ようじ＝京都府立山城郷土資料館)

注1 (1)奥村萬亀子「南山城地域における明治・大正・昭和の衣食住生活－その有様と変容」『南山
山城地域学術調査報告書』京都府立大学・京都府立大学女子短期大学部 1990

(2)奥村萬亀子「南山城地域衣生活調査か－近代における自給的機織と相楽木綿のこと－」
『京都府立大学学術報告・理学・生活科学』第41号 京都府立大学 1990

(3)「南山城地域の自家用織物と相楽木綿」奥村氏著『京に「服飾」を読む』染色と生活社
1998 <(2)論文も再掲>

注2 『木津町史 本文篇』P. 571 木津町 1991

注3 注2前掲書 P.569

注4 注2前掲書 P.770

注5 注2前掲書 P.577

注6 注2前掲書 P.844-845

注7 注2前掲書 P.924-927

注8 宮地正人『日露戦後政治史の研究』

有泉貞夫「明治国家と民衆統合」『岩波講座 日本歴史』17 岩波書店

注9 以下考察には、藤澤淳啓家(木津町)所蔵『京都府相楽郡相楽村是』を使用。

注10 『京都府相楽郡相楽村是』第二章代一節第二表 P.22 相楽村役場 1904

注11 注10前掲書 第一編第二章第六節第一表 P.30

注12 注10前掲書 第一編第三章第一節第二表 P.37

注13 注10前掲書 第一編第四章第三節第一表 P.59

注14 注10前掲書 第一編第二章第六節第二表 P.30

注15 注10前掲書 P.70

注16 注10前掲書 第一編第二章第六節第一表 P.30

注17 注10前掲書 第一編第二章第六節第三表 P.31

注18 注10前掲書 P.34

注19 注10前掲書 P.97

注20 注19に同じ

注21 注10前掲書 第一編第五章第四節 P.94

注22 注10前掲書 P.95

- 注23 注1前掲書
- 注24 注10前掲書 P.181
- 注25 注10前掲書 P.96
- 注26 注10前掲書 P.181-182
- 注27 『日出新聞』明治28年10月31日記事
- 注28 注26『日出新聞』記事
- 注29 「工場の出現」『岩波講座 日本通史 第7巻近代2』 岩波書店
- 注30 表「備後絰生産高の推移」(備後絰協同組合調査『備後絰』(新市町立歴史民俗資料館)1997, p.77
- 注31 『日出新聞』明治32年4月11日記事
- 注32 『山城綴喜郡誌 京都府相楽郡誌 京都府宇治郡誌』(復刻版 名著出版) 1972, p.124
- 注33 宇治市立図書館蔵写真版
- 注34 以下、京都府立総合資料館所蔵本を使用
- 注35 注1(3)前掲書
- 注36 注1(3)前掲書
- 注37 注1前掲書 P.281 (表1)「京都府における綿織物生産高のうち「双子その他縞木綿」の場合」
- 注38 注1前掲書 P.297 (表1)「相楽郡における綿織物」
- 注39 注1前掲書 P.299
- 注40 注10前掲書 P.95
- 注41 注10前掲書 P.95-96
- 注42 『日出新聞』明治36年(1903)9月の記事で、「一旦奈良に入り、それより大和物産大和絰として各地に販売する習慣となり居れる」とあり、相楽木綿の創始に関して、明治期全国レベルの生産量を誇った大和絰の影響が予想され、これについても今後考察してみたい。